
魔法少女リリカルなのは 破壊の弟、救いの兄

仮面ライダー スラッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 破壊の弟、救いの兄

【Nコード】

N7329Z

【作者名】

仮面ライダースラッシュ

【あらすじ】

転生した兄弟はリリカルなのはの世界で奇跡を起こすのか？それとも混沌を起こすのか？
しかし、歯車は動く。
動き続ける……転生者の思惑によって……

そこまでシリアスは多くないと思います。
更新速度は遅いです。

転生者の能力のアイデア募集中！

始まりの兄弟（前書き）

新連載です。

よろしくお願いします。

始まりの兄弟

〽〽ブラジル、とある学校近くの道路〽〽

そこに2人の兄弟が歩いていていた。

「はあ〽〽…」

2人は落ち込んでいた。

兄の方が縁間紡、弟は縁間称。

彼らは試験に落ち、留学する事になったのだ。

しかし、彼らは片や高1、片や中2、紡はともかく称はなぜ落ちたか？

理由は簡単、ブラジルはそう言う所だからである。

ブラジルでは小学生の頃から、点数が合格点までいかないと留学してしまふのである。

「まあ、勉強サボったらああなるわな。」

「俺なんて詰まらない意地のせいで落ちたしな。」

紡はポルトガル語、ブラジルの語源を4年も経ったのに理解しきれないかった。

それもあつた上に、紡は勉強を自分からしなかった。

それは落ちるだろう。自業自得だ。

称はというと、母に渡して来いと言われた提出期限切れの宿題の渡さなかつたせいで落ちたのである。

詰まらない意地のせいで落ちたのだ。

しかも、そんな自業自得の会話のせいでこの後、トラックに轢かれるのだから本当に自業自得である。

しかし、そのトラックだけは自業自得では無かつた。

その後、轢かれた2人は死亡した。

〜とある空間〜

2人は寝ていた。

しかし、兄は直ぐに起きた。

「此処は…？つて、称！起きろ！！」

揺さぶって起こそうとする紡。

「良いじゃんか寝させるよ…」

眠たそうに答える称。

「寝るな！起きろ！！」

何とか起こそうとする紡。

「しょうがないな……」

称はあたりを見渡した。

そこには、自分と紡以外にもう一人、見知らぬ誰かが居た。

「あの〜、ここはどこですか？」

兄は質問を試してみた。

「何言ってるんだよ兄貴。これはどう見たって転生チャンスじゃないの？」

呆れた様に言う弟。

「まさかそんな〜すいませんでした！！」「ウソダンドコドーン！！」

ショックで濁舌が悪くなる紡。

〜〜説明終了〜〜

話を聞いた通りだと、この神様は近くの病院の中の患者を迎えにくい為に力を使っただが、運悪く霊感が強い者が偶々その力を弾き、ト

トラックに当たり運転手が死亡、そのトラックが2人に衝突した。

「それで、リリカルなのは世界に転生させますので、何か願いを一つ叶えましょう。」

「俺原作知らないんだけどな…、まあいいか」

原作を知らない称は前向きだった。

「わかりました。(はあああ)。)」

原作を知っている紡は内心がっかりしていた。

まだ、前世でやり残した事が沢山ある。

それは、アニメの世界に転生しても拭い切れるものでは無い。

親友との約束を破り続けたまま、逝きたくは無かった。

なら、願ってみようか。

「別世界を移動できるようにして欲しいんですが。」

「すみません。すでに他の転生者が望んだので無理です。」

何そのドラゴンボール。

「最後にやってたゲームはあれか。じゃあ、あれにしよう。」

考えているうちに、弟が選り終わった。

「世界を超える方法……！！！」

紡は親友の顔を思い出し、能力を選んだ。

「俺を…原作の3000年前の光の国に転生できますか？」

「可能です。光の国は時空管理局でも超えられない別次元の壁の外側にあります。もちろん、ウルトラマンはその壁を超えられます。」

話を聞く限りでは、宇宙とはウルトラマンゼロに在ったようにバブル状に包まれており、そのバブルは2重構造になっており、バブルの中にもうひとつのバブルで囲まれていて、そのバブルの膜を別次元の壁と呼ばれているらしい。

こうして、別世界に行く手段を確保できた紡。

「じゃあ、次は俺だな。俺は『勇者のくせになまいきだ』の破壊神の能力が欲しい！」

「了解しました！よき人生を！」

こうして、兄弟は転生した。

（～転生から3年後、建物の屋上～）

『Meu senhor, come? ou cair semet
e de desejo.』

（マスター、欲望の種が落下し始めました。）

「そうか、じゃあこれが原作開始か。」

『Seu irm?o en?o vier?』

(貴方のお兄様は来ないのでですか?)

「さあな。俺がやるのは、この人生を楽しむことだけだ。兄貴には兄貴なりの考えがあるのだろう。」

でも、原作には介入するって言ってたし、その位に会えるだろ。」

そういつて、称は駆け出した。

~~~~~転生から3千年後~~~~~

紡、否、ウルトラマンコネクトは地球に行こうとしていた。

「じゃあ、休暇を消費しますか!」

「コネクト!待つんだ!」

しかし、それはウルトラ警備隊隊長のゾフィーによって止められた。

「何ですか?休暇届出したでしょ?それに休暇を消費しろって言ったのはゾフィー隊長でしょ。」

「だからって、100年間の休暇を一気に使うな!!」

コネクトは100年間、1回も休暇を使わなかった。

「え〜つと、1年間に1ヶ月の休暇ですから100ヶ月…たった8年分じゃないですか。」

「だから駄目だといっているだろうが！」

「しょうがないな…じゃあ、12ヶ月で良いですか？」

「1年間か…まあ、いいだろ。」

「それじゃあ行つて来ます！」

「しっかり休めよ！」

「はい！…たぶん無理だけど（ボン）」

そう言つて、コネクトは地球に向つた。

「待ってるよ！ジュエルシード！！」

彼は、欲望の種に何を望むのか？

## 始まりの兄弟（後書き）

感想や指摘など、お待ちしております。

**原作前の兄弟 鍛える兄、戦う弟（前書き）**

弟はのデバイスはポルトガル語です。

一応、訳を付けておきます。

原作前の兄弟 鍛える兄、戦う弟

コネクトSIDE

〱〱原作2400年前の光の国〱〱

どうも、紡改めウルトラマンコネクトです。

ウルトラマンとして成人一歩手前まで成長しました。

「来い！コネクト！」

「おりゃあああー！」

ただいま、タロウ教官の元で模擬戦しています。

しかし、流石に強い！

まるで赤子の様にあしらわれ続ける俺。

「ほら、隙だらけだぞー！」

「クソ！」

蹴りを避けられてまた一発入れられる。

「ほらどうした！その程度か！？」

「まだまだだ!!」

立ち上がって、また挑む。

こうなったら!!

「コネクトキャッチー!!」

教官の拳の前に小さなバリアを張り、当たった瞬間拳がめり込む。

「!?!」

「喰らえ!!」

その予想外の手応えに隙を見せた教官に一発入れた。

「ほお……」

それを見られていたとも知らずに…

~~~~~原作の2000年前~~~~~

ウルトラ一族として成人を迎え終わった頃。

「レオキック!!」

「ぐああああ!!」

タロウ教官との模擬戦をレオ師匠に見られて、今こうして鍛えられ

ています。

でも、これはいじめだよね!?

レオキックをいきなり放つとか!

「この…!ゼペリオン光線!!」

ウルトラマンティガとまったく同じ動作で放つ光線。

練習率は他の技よりも多いので威力の一番高い技だと思う。

「ふん!」

しかし、それはハンドスライサーでいとも簡単にそらされた。

その後、接近戦でポッコボコにされた。

〳〵原作の1500年前〳〵

もう接近も遠距離もそれなりに戦えるようになった頃。

「やりましたよ!師匠!」

「うん!」

あの後、しっかり鍛えられた後、俺は旅に出た。

そこで、ティガに出会い、技を教えてもらいデラシユウム光流とミ

ラクルバブル光線、更にはゼペリオン光線の威力が上がった。

そして今、俺はコスモス師匠からルナファイナル、ルナエクストラ、ルナポーシヨン、ネットトラックボックス、フルムーンレクト等々様々な技を覚えた。

それにしても、この手の技は心が弱いと使えないらしいが、俺はそこまで弱くなかったようだ。

〳〳原作の1000年前〳〳

ネクサスに出会って技を覚えたり、ヒカリと知り合ったり、ウルトラ警備隊に入隊したりと一番大変な時期だった。

しかし、そのおかげで地球の場所が把握できた。

これで原作介入の準備は万全だ！

後は、プラズマスパークコアをカラータイマーに付けるのみ！

しかし、俺は影が覆い被された。

「あ…、れ、レオ師匠……（汗）」

「プラズマスパークに近づくなと何回言わせる気だ!!」

「良いじゃんかよー！触ってないんだから！」

「今日という今日は、ミッチリ扱いてやる！覚悟しろ！」

「速さなら！こっちのほう为上だ！！」

「信用なら、俺のほう为上だ。」

レオ師匠がそういうと、ウルトラマン、エース、セブンの3人が現れた。

「大人しくして貰おうか？」

転生前の俺はここで諦める所か、プラズマスパークコアに近づきもしなかっただろう。

だが、俺の目標を叶える為になら！人が傷つかない方法なら！

「俺は躊躇しない！！」

そういつて、コスモス師匠直伝のスペースモードで宇宙を飛んだ。

この状態なら、他のウルトラ戦士の2倍〜3倍程のスピードが出せるだろう。

追いかけてくる3人を確認しながら、俺はウルトラマンヒカリの家に向った。

（〜ヒカリの研究所兼家〜）

「ヒカリさん！！」

俺は、プラズマタイマー（仮）の開発にヒカリさんを頼った。

「ああ来たか。光の国の方が騒がしかったからな。やはり君か。」

「とりあえず、プラズマスパークの解析データです。」

「本当に取って来たのか…」

「約束道理、お願いしますね。」

「まあ、約束は守ろう。」

研究のための必要材料は俺がそろえる。それが約束だった。

「じゃあ、今から逃げて来ます。」

「まあ、大人しく叱られてきた方が良いと思うが…」

俺は、ネクサス師匠がいる場所に向った。

～～アナザースペース
異世界宇宙～～

「相変わらずでたらめだな。一体、どうやってあの膜を通って来れる?」

「鍛えてますから!」

そんなどうでもいい会話をしてから帰る。

帰った後に母さんから飯抜きを喰らったのは別の話。

称SIDE

〓〓原作の3年前〓〓

「あ、家どうしよう…?」

転生して最初に出た言葉がそれだ。

俺は修行とかめんどくさいから、適当に原作の始まる3年前に転生した。

いる場所は山。

しかし、家が無い。

親がない。

体が縮んでしまっていた。

これは転生ではなくトリップじゃないか？

「まあ良いや。破壊神の力で掘れるし。」

「じゃあ、この山を拠点にしましょう!」

俺の横には魔王が居た。

もちろん、白い方じゃなく紫色の魔王(笑)だ。

「んじゃあ、掘り始めますか！」

その後、巨大な蟻の巣ができた。

〳〵原作の2年前〳〵

小学2年生となった俺。

修行しながら日がどんどん経って行ったある日。

俺の前で2組の転生者が3対2で争っていた。

3人居る方が先から相手をモブだの、雑魚だの言っているが3対2で30分間も戦っているんだから2対2だったら2人の方が勝っていただろう。

それにしても、3人の内、1人はデバイス？って言うのを使っている、残りの二人はISとナルトの忍術みたいだな。

もう片方の2人は多分、ナルトの忍術と仮面ライダーアギトだな。

俺は原作知らないが、魔王からいろいろこの世界について教えてもらった。

俺の破壊神のツルハシもデバイスでユウナ式と言う術式を使っらしい。

にしても、なんだあのデバイス持ちの出鱈目な魔力は…

力があるのに、出鱈目に漏れ出してるじゃんか。

通常の2倍の速度で無くなって行くな。

おっと、会話でも聞くか。

「お前らしつこいぞ！いい加減くたばって、はやてを俺達に渡せ！」

「そうだ！はやては俺達に惚れる運命なんだ！さっさとぶっ倒れる
！」

「俺達のオリ主の力の前に倒れる！」

3人共最低だな。それにしてもおかしな…

神様が叶える願いは1度叶えたら、同じ願いは叶わない筈なのに何
で2人もナルトの術を使っているんだ？

また、螺旋丸同士がぶつかってるし。

「ふざけるな！はやては、うちの妹には指一本触れさせて堪るか！
！」

「ああ、虚夜の言うとおりだ！絶対、倒す！」

さてと、見物してたらテンションあがってきたし、最低系は嫌いだからな…

「くたばれ！スターーー！ライトー！！デストロイヤー！！！」

デバイス持ちが砲撃しやがった。

おうおう、すごい技だ。

ここらで加熱するか。

「ピカレッタ！シャマ・シレンシオーザ（静かな炎）！」

『Chama cilenciosa!』

俺の前で目の様な魔方陣が現れ、その目が開いたと思ったら、ロン
グドラゴンの火球が勢い良く相手の砲撃に向った。

砲撃より小さい火球。

しかし、砲撃は火球が当たった事によって狙いが逸れた。

あの炎の中にはかなり高密度の魔力が仕込まれているからな。

「「「「「！？」「「「「「」

「おいおい、最近のオリ主は3人で2人をいじめるのか？」

「誰だ、てめえ！」

俺は、その質問を無視して2人の方を向いた。

「おい、お前ら。原作は知っているのか？」

俺の質問に虚夜と呼ばれた奴が答える。

「ああ、知っているが。」

「じゃあ、取引だ。俺がお前らに加勢してやる。こいつら倒した後で原作について教えてくれ。」

「…どうする、翔一？」

「まあ、デメリットは無いに等しいし、今は厳しいからな。」

「わかった。協力を頼む。」

「OK！じゃあ、行くか！」

そして俺は3人の方を向く。

「そんじゃあ、行くか！」

「お前も俺達の邪魔する奴か！直ぐにぶっ潰してやるよ！」

「1対1だ。俺があゝの忍術の奴を止める。」

「わかった。」

「喰らえ！火遁・豪火球の術！」

相手は口から火を吐いてきた。

「ピカレッタ、ボンダーデ・ド・デウラゴン。」

『Bondade do dragão!』

対炎の魔法だ。

因みに訳すとドラゴンの優しさだ。

俺を炎が包む。

「ああ、暑いな。魔王、飲み物無い？」

「地下に戻れば魔力コーラが有りますので頑張ってください。」

「わかったよ。」

「てめえ！なんで、オリ主の俺の炎を喰らって平気なんだ！！」

「お前がオリ主じゃないからだろ？」

「そんなワケあるか！！風遁・螺旋手裏剣！」

あ、投げてきやがった。

「魔王でガードベント！！」

俺は、魔王を投げた。

「え、ちょ、破壊神様！？グアアアアア！！！！」

「な！？自分の仲間を盾に！！！！？」

投げた魔王にぶつかった螺旋手裏剣が破裂した。

「近くに居た…お前が悪い。」

「私じゃなかったら、死んでましたよ!！」

「な!?!生きてるだと!?!」

「さてと、遊びは終了。隙だらけだ。リンニヤ・デ・ムスゴ!！」

『Linha de musgo!』

訳はコケの糸。

ニジリゴケ10体で作ったバインドだ。

しかも、ニジリゴケはあいつにとって最悪の魔物だろう。

エレメントが吸うのは魔力、ニジリゴケが吸うのは養分。身体エネルギーだ。

チャクラは身体エネルギーと精神エネルギーを混ぜなきゃいけないはずだ。

しかも、吸ったエネルギーは俺のデバイス、ピカレッタに溜まり、溜まった魔力で魔物を召喚できる。

しかし、容量オーバーすると不味いからさっさと使わないとな。

「なんだ、このバインド!?!外れねえ上に、力が抜けてく…!！」

「じゃあ、偽勇者は破壊神に倒されましたとき。魔方陣召喚!!」
相手の下にデーモンの魔方陣が出現し、その魔方陣から腕が出てきてあいつをがちり掴む。

「な、な、何だ!?この腕は!?!」

その疑問を無視して俺は喋り出した。

「力を手に入れた偽りの勇者。」

もう片方の足を掴まれる。

「ひいひい!!」

情けない声でおびえ始める。

「その傲慢で戦ってはいけない者に挑み、」

あいつは引きずり込まれ始めた。

「や、止めてくれ!!」

「その力ゆえに魔物はその者を気に入り、」

あいつの下半身まで入っていく。

「な、何でもするから助けてくれ!!」

「魔方阵の生贄となり、」

首の下まで入り始めた。

「た、頼む！見逃してくれ！！！」

「情けも無く、怯えて、心も体も喰われ切る。」

何かが噛み付く音が鳴る。

「グシヤ。」

その小さな音は、悲痛の叫びを生み出した。

「あああああ！！！！！」

「その声が、魔の者の食を楽しませた。」

その後、骨の碎ける音が何度か続き、やがて音はやんだ。

俺は口を開いた。

「俺…、やっぱりホラーは無理だ…」

情けない事に今の光景に怯えていた。

「まあ、破壊神様は元人間ですし慣れていくしかありませんよ。」

「そう…だな。」

その後、2人も無事戦闘が終了。

原作について教えてもらって、ついでに友達にもなった。

つうか、あいつら俺と同じクラスかよ！

疲れたし寝るか・・・

兄貴どうしてんだろ？

原作前の兄弟 鍛える兄、戦う弟（後書き）

弟のデバイスの名前はピカレットαツルハシです。
次は、いよいよ原作開始です！

兄弟のプロフィール

兄のプロフィール

名前：ウルトラマンコネクト 縁間えんま 紡つむぐ

原作開始時の年齢：3000歳 人間体では高校生位の体

好きな物：寿司、ゲーム、友達

嫌いな物：ゴージャ、最低系転生者

備考：ウルトラマンとしてリリカルなのはの世界に転生した。

転生前に留学してしまった為、努力の大切さを知った。

転生した世界に目的の為、ジュエルシードを集める。

一応、転生後の世界を楽しむつもりらしい。

ウルトラマンは万単位で生きる為、記憶力も高く原作はそれなりに覚えている。

単体で異世界宇宙に行ける能力を持つ。
アナザースペース

なお、人間体では非殺傷ではあるが、変身時と同じ技が使える。

使える技：

スペシウム光線、八つ裂き光線、ウルトラリング、

ゼペリオ光線、デラシウム光流、ミラクルバブル光線、

ルナファイナル、ルナエキストラ、ネットトラック・ボックス、フ

ォームチェンジを含めたその他もろもろ、

オーバーレイシュートローム、オーバーアローシュートローム、

コネクトキャッチャー等のオリジナル技

弟のプロフィール

名前：縁間えんま 称しょう

原作開始時の年齢：9歳 小学3年生 私立聖祥大附属小学校

好きな物：寿司、カレー、ゲーム、力を使う事、他人の邪魔をする事

嫌いな物：ゴーヤ、最低系転生者、その他もろもろ

備考：勇者のくせになまいきだの破壊神の能力を持つ。

破壊神のツルハシがユウナ式のデバイスで名前はピカレツタ。

ギャグ補正も付いていて、2話で破壊神が螺旋手裏剣を喰らっても復活したのもこのため。

原作を知らず、はやての三つ子の兄、虚夜と翔一に原作を教えるもらった。

戦いは魔物を召喚して戦わせるか、魔物の特性を利用して変幻自在な攻撃をするかの二つ。

彼の使用する魔法は、とんでもなく理不尽なものが多い。

ユウナ式：召喚魔法を行うためのサポートに特化したデバイス。

また、召喚獣の特性を魔法とあわせることが可能。

魔王が改造し、カートリッジシステムが付けられている。

他のツルハシにも変えられる。

使える技：

シヤマ・シイレンシオーザ（静かな炎）、他のドラゴン種のプレス

を合わせる事で火炎放射や、威力の底上げができる。

ボンダーデ・ド・デウラゴン（ドラゴンの優しさ）、ドラゴン種の炎は魔王や他のドラゴンにダメージを与えないのを利用し、相手の炎を無理矢理ドラゴン種の炎としてバリアジャケットに認識させるアンチ火炎属性の魔法。

リンニヤ・デ・ムスゴ（コケの糸）、かなり丈夫なバインド。ニジリゴケの養分吸収をバインドと合わせた魔法。くつついている間、捕縛者は身体エネルギーを吸収される。他のニジリゴケ種やエレメント種でもできる。

????:とんでもない魔法。女性に対してかなり効果がある魔法。

????:ツルハシでの攻撃技。ヴィータのパクリ。

????:称の秘密兵器。カートリッジを8発も使う。なお、この技は3種類ある。

兄弟のプロフィール（後書き）

以上が主人兄弟のプロフィールです。

弟の魔法は全てポルトガル語になります。

もし間違っていたら教えてください。

開始の兄弟 戦つ兄

コネクトSIDE

（～原作の3時間前（なのはが魔法少女になる前）～）

俺は今、地球にスペースモードで向っている。

休暇を取った俺は地球に向っていた。

ブルスマタイマーも完成したし、後は到着のみ！

（ジュエルシード・・・何個くらい有れば俺の願いは叶うんだ？）

そんなことを考えていると、突然連絡が入った。

『コネクト！聞こえるか！？』

「レオ師匠？どうかしたんですか？」

『まずい事になった！怪獣墓場から地球に向けて怪獣達の怨念が放たれた！』

「なん……だ……と……！？」

『騒ぎを起こしたメフィラス星人は倒したが、タイラント、ゴモラ、レッドキング、エレキング、ゼットンの5体』

(何だ、ゼットン以外はもう3回ずつ倒したし、ゼットンも1回は倒したことがある！楽勝じゃないか！)

『のEXの怨念だ！』

「ははは、楽勝、楽s yうん？今なんて言いました？」

『5体の怪獣のEXだ。』

無理ゲーだこんちくしょおお！！！！

「で、でも、怨念が何で地球に向っているんですか？」

『おそらく、自分の願いを叶える為にさまよっているんだろう。もしくは魔法関連の何かに引き寄せられているのか……』

ジュエルシードか、こんちくしょおお！！

「なら、怨念がそのアイテムを手に入れる前に、手に入れればいいんですね！」

『もしくは、実体化したそいつらを倒すしかない。』

「じゃあ、がんばって探してきますね！」

『ああ、頼んだぞー！』

そう言って、連絡は終了した。

(よし、俺の目的の為にジョエルシードを拾おう!! EX系は不味い!)

「じゃあ、飛ばすぜ! スペースモード、最大速度!!」

その2時間後、俺は海鳴市に到着した。

称SIDE

〳〳原作の9時間前(なのはが魔法少女になる前)〳〳

あの戦いから1年が過ぎた。

あの後には、八神の三つ子の兄2人から原作を教えてもらい、偶に加勢したり、偶に俺に襲ってくる転生者を倒したりして、全部で10人の転生者を倒した。(因みに、魔王がその屍を回収している。)

まだ残ってる最低系の転生者は少なくとも1人居るが、ほっとしている。

そいつは、なのはやその友達2名とよく話していて、明らかに迷惑している目を向けているのに惚れていると思っ込んでいるらしい、テンプレ勘違い転生者だ。

虚夜と翔一の話では今日はなのはが魔導師になる日らしい。

昨日、念話が聞こえたしな。

そして、只今八神兄弟達と屋上で話し合っている。

「で、どうするよ？」

「そうだな……」

俺とこいつらは、こいつらの妹のはやて以外の主要人物とはそこま
で親しくない。

どうやって介入するか、介入しないか考えている。

「じゃあ、前から3人共魔導師で、珍しく魔力反応があったので現
場に向った……でどうだ？」

「まあ、それが賢明だな。」

「じゃあ、最大の障害は…最低系や介入派だが…」

「安心しろ。神様が地球に居る転生者の数は20人だって言ってい
たし、もう10人近く倒したんだ。」

「少なくとも、最低系は多くて3人がいい所だな。」

「もし、別世界から地球来た奴らはどうする？」

「まあ、そこら辺は臨機応変だ。」

「わかった。」

そんな会議を昼休みの内に済ませた

〜夜 原作開始〜

「行くぞ！ピカレッタ、セットアップ！」

『Sim sinhor!』

(了解しました、マスター！)

俺の着ていた服は青と水色のバリアジャケットを纏う。

しかし、ここで予想外の事態が起こった。

『!? Senhor! L? na 700M do norte,
sentiu for? a do semente!』

(!?マスター！北方面の700m先で、種の力を感しました！)

「なんだと!?!」

《称！大変だ！5つのジュエルシードが同時に発動した！しかも、
全て同じ場所だ!》

《マジかよ!?!》

かなり焦り始めた。

《しょうがない!こうなったら、その場所に向おう!》

《了解!》

俺は目的地へと向った。

紡SIDE

〽〽ジュエルシード発動地点〽〽

「遅かった！」

俺は内心舌打ちしながらも、状況を確認した。

確認できたのは、通常の半分以下の大きさのEX怪獣達だ。

いくら4m位しかないとはいえ俺も許可がないと変身できないので、モンスターハンターみたいな状態だ。

しかも、強くなったとはいえそこまで戦闘に向いている訳ではない。今まで倒した怪獣は何体も居るが、殺した数は片手で数える程度だ。

「しょうがない！フルムーンレクトで怨念を鎮められるか試すしかない！」

俺は決意して、怪獣の群れに突っ込んだ。

「コスモス師匠直伝！フルムーンレクト！」

興奮を抑える光を怪獣の群れの上から放つ。

段々苦しんできたが、こちらに攻撃してきた。

レクトを放ちながらも、火球や電撃、跳んでくるレッドキングの拳

を避ける。

「あと少し!」

しかし、俺に向って何かが飛んで来た。

「何だ!？」

俺はそれを避けながら、弾が来た方向を見るとニヤニヤしながらこちらを見ている奴が居た。

「ウルトラマンの能力か、厄介だからここで消えて貰おうか!」

(くそ!こんな時に転生者かよ!)

「ゲート・オブ・バビロン!」

こいつ!よりもよってギルガメッシュの能力か!?

俺の方に無数の宝具が飛んで来る。

「つくそ!コロナモード!」

フルムーンレクトを止めて、回避に集中する為にコロナモードになる。

「やめる!この怪獣を止めないと、町に被害が!」

「っは!それがどうした?俺はなのはとフェイト、はやてが無事ならどうでもいい!」

「この腐れ外道が！」

「何とでも言え！どのみち、お前はこの圧倒的な数の宝具の前に倒れるんだよ！」

(っ！)

俺は回避する事をやめた。

「その手が有ったか。」

俺がそう呟いた時、電撃とアイツの宝具が飛んできた。

「力が有って、数が足りないなら増やせばいい。」

攻撃が当たる瞬間、俺は6人に増えた。

「な、何！？」

「コスモス師匠直伝、コロナ・ブランチ。」

劇場版でネオバルタンと6対6の戦いを繰り広げた分身を作り上げる技だ。

そして、5体の分身は怪獣の方へと向った。

「『ウルトリング！』」

全員が回転して、光の輪を相手に飛ばした。

もともと、攻撃技より特殊な技が得意な俺のウルトラリングはEX
とは言え簡単に壊せない。

がっちり捕まって、身動きできない怪獣達。

「「「「「コロナエクストラクト!」「」「」」」」」

両手を前に出して、分離光線を放つ技だ。

そして、怪獣の怨念とジュエルシールドが分離した。

「「「「「ブレイジングウェーブ!」「」「」」」」」

怨念に向けて炎の圧殺波動を放つ。

怨念が消えていくのを見て、分身は俺の元に戻った。

分身達が戦っている間も俺と転生者は戦っていた。

「くそ!なんで喰らわない!?!」

ルナモードになった俺は師匠の教え道理の構えで宝具を捌き、時
は破壊していた。

「悪いが、君の負けだ。」

「そんなワケあるか!?!」

「手加減はする。どうか俺を許してくれ。」

俺は拳と拳を自分の前で一度ぶつけて、拳を右と左に放しながら手のひらを開いて行き、十字を組んで光線を発射する。

「コネクションショット！」

俺の光線は真つ直ぐ転生者に向かった。

「その程度！！！」

相手は、紫色に輝く剣をを出してきた。

そしてそのまま、それを前に突き出した。

「エヌマ天地乖離エリシユす開闢の星！」

その攻撃と、俺の光線はぶつかり合った。

しかし、俺の攻撃は非殺傷、勝ち目は無い。

俺は、その攻撃に飲み込まれた。

「何が勝つただ！ザマーミロ！俺が最強だ！！！」

「そうかな？」

煙が晴れると、俺が立っていた。

「な、何で生きてやがる！？俺の・・・最強の攻撃だぞ！！！」

「俺の防御の方が堅かった。それだけの事だ。」

「有り得ない!!!エマを防ぐことなんかできる筈が無い!!!」

「現実を見る。転生者。」

俺は俺の最初に憧れたあの構えをした。

前に両手を出し、開きL字を組んで発射する。

「ゼペリオン光線!!!」

その光線は、見事にアイツに当たった。

「うそだああああ!!!!!!」

「手加減はした。生きろよ。」

俺は5個のジュエルシールドを回収して、そこから離れた。

開始の兄弟 戦う兄（後書き）

宝具の力だけで、正義の為に努力し続けてきたウルトラマンを倒せるとは私は微塵も思っていません。

しかも、その内の5人が脱獄か……場合によっちゃ逆恨みで他の転生者が殺されそうだな。

「ふぁゝあ…寝るか……」

その後、俺はベットで眠りに着いた。

称SIDE

結局、俺は昨日の夜、転生者の妨害もあって間に合わなかった。

そして、今は学校で昨日の事について3人で話し合っていた。

「ここに来てイレギュラーか……」

虚夜は頭を押さえた。

「ていうか、早すぎるだろ……」

翔一も頂垂れている。

「知り合いの転生者は、ゴモラを見たとか言ってたしな。」

虚夜の情報。

「俺の方では、ウルトラマンを見たとか言ってた。」

翔一の情報。

「間違いないな、俺の兄貴だ。」

俺の答え。

「じゃあ、暴走を抑えられたジュエルシードは全てお前の兄貴が取ったのか……」

「不味いな……、ジュエルシードを奪ってでもフェイトやなのはに近づく奴は居るだろうし……」

「まあ、兄貴なら問題ないよ。」

「何で？」

おいおい、転生者の中でもきつと一位だぜ？

「まあ、兄貴の強さは俺も良くわからないけどな……」

紡SIDE

「ドコだ？」

ジュエルシードを集めている紡です。

しかし、全然見つからないな……

「神社か……休みしていっくっ！」

あれは……！

「ジュエルシード！これで6個目！」

原作アニメの第2話の場所だった。

「そういえば、此処が2話目の場所か…しょうがない、放置して後で取ろうかな？」

称SIDE

学校終わったし、帰るか…

「ん？」

宝石？

「これジュエルシード？あとで、魔王にあげよ」

しかし、いきなり剣が飛んできた。

「おい、俺がオリ主になるためのもんだ！返しやがれ！！」

何だこの金ぴか？

「誰、お前？」

「何だ、この姿を知らないのか？」

「悪いけど、俺はアニメ見ないでゲームばっかやってたから。」

「じゃあ、好都合だ！」

そう言っただけの後ろから剣や槍がたくさん出てきた。

「凄いな…」

「死ね！！」

30本以上の剣が一斉に飛んできた。

「危なっ！ポルタ・ド・デモニーオ！」

『Porta do demônio!』

訳は悪魔の扉。

魔方陣が出現し、称はその後ろに隠れる。

「は！そんな物、直ぐ壊してやる！！」

ばっかだなく、その武器が魔力を纏ってるのは知ってるよ。

そして、一斉に剣が魔方陣に刺さった。

しかし、魔方陣は壊れなかった。

「な、何で壊れない！？」

「その武器が魔力をまとっているのは知っている。だから、魔力が溜まった魔方陣で、武器の魔力を相殺したんだよ。」

説明しながら、魔方陣の中から出てきてやった。

「さてと、魔方陣も魔力が無くなっちゃったね…まあ、好都合だけどね!」

そう言つて、魔方陣の真ん中を突く。

「来い!邪神!」

魔力、養分の無い魔方陣から生まれるデーもん種最強の魔物、邪神。

大きさは3m、スピードは遅いが問題ない。

「は!そんな奴、これで潰す!王の財宝!」
ゲート・オブ・バビロン

うわあ、また増えた…

「憂さ晴らしをさせてもらつぜ!恨むなら昨日、俺に卑怯な手で勝つたあのクソ野郎を恨むんだな!」

どうせ、返り討ちにされただけだろ…

「行け!邪神!」

俺の号令とともに、邪神は金ぴかに向つて動き出した。

「は!遅い!」

金ぴかはまた槍を何本も放つてきた。

邪神は動きが遅いから、1本も避けなかった。

そのまま、5本、6本、7本と刺さって行き、12本目で遂に消滅した。

「やっぱり駄目だったか」

「終わりだ！」

金ぴかは更に30本の武器を俺に向かって発射してきた。

「ふ…大丈夫だ、問題n」

俺は台詞の途中で金ぴかの武器を喰らい、武器が爆発した。

「あははははは！！やっぱり俺が最強だ！！昨日の奴もまぐれだったんだ！！よし！見つけ次第、あいつを殺してやろう！！あははははは！」

そう言っつて、あいつはどっかに行った。

まったく、なんて奴だ…

「ギャグ補正が無かったら死んでたぜ…」

ギャグ補正…メタ発言、ネタ発言、もしくは真剣な雰囲気をぶち壊せば発動する補正……だと思っつ。

「ただ、爆死回避の代償は1分間アフロ…参ったなあ……」

まったく、なんて補正だ…

シードと兄弟1 探す兄、ギャグな弟（後書き）

皆さん、良いお年を！！

他の転生者 八神の事情、最低の事情

〳〳八神家〳〳

八神家には3人の人物が住んでいた。

長男の八神虚夜、次男の翔一、末っ子のはやてである。

虚夜と翔一は転生者であり、翔一は八神家の養子である。

そんな3人の日常は虚夜が起きる事から始まる。

虚夜が起きて、まずは顔を洗い、その後玄関のドアを開ける。

そして、虚夜の予想通り、人が倒れていた。

それは転生者である。

虚夜はため息をつき、転生者は驚く。

「これで、15回目か…」

「お、お前は誰だ！？まさか転生者！？」

「ああ、はやての兄だ。」

そう言いながら、転生者に近づいた。

「もう来るなよ。ルーラ！」

ドラクエの転移呪文を唱えると、転生者は別世界に転移した。

「ふう…二人は起きたかな？」

しかし、1つ疑問ができる。

神様が叶える願いには幾つか制約がある。

- ・既に叶えた願い、力は叶えられない。
- ・叶えられる願いは1つ。
- ・願いを増やすことは出来ない。

しかし、虚夜はナルトとドラクエの技を使っている。

彼の願いは『転生者の能力を反対属性で使えるようにして欲しい』である。

例えば、氷輪丸を使う転生者が居た場合、彼も使用できる。

しかし、氷では無く炎を操ることになる。

そして、転生者の殆どは能力とそれに必要なエネルギーが自動的に平均より高い状態で転生する。

つまり、彼には転生者が居れば居るほど、能力の種類がばらつくほど彼は強くなり、手札が増える…

しかし、それ程簡単な事ではない。

まず、能力を彼は把握できていない。

彼が直接見るか、勘で能力を発動するしかない。

更には、暴走や代償の危険もある。

攻撃を受けすぎて勝手にバーサーカーの狂化スキル発動や、万華鏡車輪眼のせいで失明等、考えれば考えるほどリスクも出てくる。

さて、彼は転移完了を確認して家に入って行った。

「さてと、はやて達はもう終わったかな？」

虚夜が起きると、それにつられて残りの2人も起きる。

そして、はやてと翔一は朝食を作る。これも、この家の日常である。

「ほな、翔兄ちゃん、味噌とつてえな。」

「うん。赤味噌でいいね？」

「ええよ。」

翔一の願いは『仮面ライダーアギトに変身できる様にして欲しい』である。

別に彼の生前がオタクであった訳ではなく、彼はこの世界の原作を知らない。

養子になったのも、アギトの力のせいで両親に捨てられただけであった。

その後、八神家に拾われた彼は、こうして八神の両親に感謝しながら忘れ形見の2人を世話している。

それと同時に、妹を助けたいと考えている。

「じゃあ、俺と翔一は行って来るぞ。」

「行って来ます！」

「2人とも、行ってらっしゃい。」

こうして、八神家の朝が始まった。

〳〵とある家　なのはの家の隣〳〵

この家に住むのは、おそらく転生者の中でも幸福な転生者だろう。

彼の名前は欲道進^{よくみちすすむ}。

いわゆる、ハーレム目当ての最低系転生者である。

そんな彼はクラスもなのはと一緒に、席にいたってはなのはの隣。

更に、彼の願いは『仮面ライダーオーズに変身できる様にして欲しい』である。

欲深い彼にはピッタリの能力だろう。

そんな彼だが、1つだけ不幸なのは、子供の純粋な心が彼の欲望を僅かながら察知し、なのは達が警戒していることだろう。

そんな殻は今日も、欲望だらけの笑顔を彼女達に向けている。

~~~~とある豪邸~~~~

この豪邸に住む家族は、子供を産んで5年間で金持ちになった。

その子供は最川さいかわ恵留めぐる。

本人は、恵みを留めるという名を気に入っている。

そんな彼もちろん転生者である。

が、そんな彼はイライラしていた。

「しまった…もしかしたらジュエルシードを破壊したかも…」

彼は称との戦いでジュエルシードを取る前に去って行った。

その後、その場所に行ったがジュエルシード所か死体すら見つから

なかった。

彼の願いは『ギルガメツシュと同じステータスにして欲しい』だ。

あくまでステータスに載っている事が彼の力となるが、彼の趣味なのか戦闘時は魔力で髪を染めて、金色の鎧を纏い、背まで変えた。

ステータスに宝具についても書いてあるため、使用可能である。

しかし、ギルガメツシュの傲慢さまで得てしまった為、ジュエルシードを取り忘れてしまった。

「くそ、貴重な原作への布石が！」

彼の嘆きが響いた。

**他の転生者 八神の事情、最低の事情（後書き）**

まあ、主役兄弟以外の事情でした。

さて、今年最初の更新ですが、これからもよろしくお願いします！

## シードと兄弟2 出会う兄、閃く弟

### 紡SIDE

あの神社のジュエルシードは結局は取らなかった

理由は、なのはとユーノの他にもう一人、転生者が居たからだ。

アイツの能力が良く分からないが、最低系と言う事は良くわかった。なので、今回（アニメ第3話）で奴の戦闘を監視しつつ、ウルトラ戦士として被害を最小限に抑えた。

どうやら奴の能力は仮面ライダーオーズの様だ。

最低系にヒーローの能力が有るのは嫌だが、これは思ったより厄介だ。

オーズは約150種類以上のフォームになれる。（オレンジのメダルで亜種ができるなら）

それに、CMでしか見たこと無いがスーパータトバコンボについても調べたい。

兎に角、情報が足りない奴だ。

それに、無理して取らなくてもジュエルシード以外にも地道に探せば、前世の世界に帰れる。

それに、神様も言ってたな。全ての世界の時間軸は多少の差は有るが年代的にはそこまで違いが無いそうだ。

なら、早く前世に戻っても意味は無い。

さてと、今回はフェイトとのエンカウントか…

恐らく転生者居るだろうが、まあこちら辺で少し腕試しだ。

〳〳月村家の庭〳〳

ちよつと早く来たけどまあいいか…

「にしても、このブレスレット本当に出来たのか…」

ヒカリに頼んで作ってもらったコネクトブレスレットとこの前の怨念の件でもらったプラスブレスレット…っと言っても、メビウスブレスレットとナイトブレスレットの色違いプラス若干性能が違うけどね。

さてと、しばらく待つか……ん？

ジュエルシード発動したか。猫かわいいな。

って、なんかフェイトとアルフに見知らぬ女が来た!!

やっぱり、転生者が居たか!

と言っても、幸か不幸かアイツは最低系では無い様だな…



そう俺のウルトラ戦士の感がそう告げている。

それにしても、フェイトと同じ金髪……髪型がまんまセイバーなんですけど。

「フェイト、先、行け。」

「どうしたの？姉さん？」

姉さん？アリシア…じゃないよな……？

「安心、直ぐ、戻る。」

げ！こっちに向ってる！ま、逃げる必要は無いがな。

「転生者？」

「ああ、お前もか？後、俺の名は縁間紡だ。」

「そう。私、フェント。貴方、目的、フェイト？」

「違うな。ジュエルシードだ。」

「渡せない。フェイト、欲しい。」

「お前の喋り方だと何か誤解しそうだな……」

レズビアンだとな。

「？まあ、いい。戦う？」

「良いのか？なのは側にだって転生者は居るぜ？」

「？貴方、違う？」

「まあ、なのはと協力している訳じゃない。ただ、俺個人で欲しがっている。」

「持つてる？ジュエルシード？」

「5個だ——っ！！」

いきなり、見えない剣で斬りかかって来やがった！

「全部、もらっ！」

「言っただろう！俺の目的の為に集めてるっ！」

そう言いながら、コネクトブレスレットで発生させたコネクトブレードで防いだ。

まったく…セイバーか……厄介だな…

「インビシブル・エア  
風王結界か！」

「そう。」

また斬りかかって来やがるか！

でも、ネロンガを相手にしたことのある俺には…

「まったく、問題無いな!!」

そう言いながら、全力で剣を振り、相手ごと

「つく!貴方、強い!」

「まだ続けるか?」

「原作通り、フェイト、傷つく!」

「——っ!?!」

そうか!3個だけじゃ、フェイトがプレシアに虐待を受ける!!

「私、フェイト、姉妹。だから、助ける。」

はあ〜…

「3個だ。」

「え?」

「3個だけだったら、渡してやる。」

俺も甘いな〜…

「本当?」

「ほれ、受けと——っ!」

何だ！？急に結界が！？

「ジュエルシードを寄越せ！！」

また、ギルガメツシユもどきか！！

「お前！何の用だ！」

「決まっているだろう！この前の屈辱、晴らしに来た！ついでに、貴様の持っているジュエルシードを貰って行こう。」

「つち！」

また王の財宝かよ！  
ゲート・ホレロン

「それは通用しない！」

ルナモードで捌き続ける。

「ならこれはどうかな？壊れた幻想！！」  
ブロックン ファンタズム

しま——っ！

俺は、数十個の宝具の爆発に飲み込まれた。

「紡、無事！？」

フェントか。心配してくれたのか？

「問題ない。この程度じゃな。」

「っち、相変わらず呆きれ程堅いな。」

「当たり前だ。何回、怪獣の攻撃を喰らってると思ってる！嫌でも打たれ強くなるさ！」

「だが、これで終わりだ！縛れ！天の鎖！」  
エルキドゥ

俺の体を鎖が縛る。

「っち！壊れない！」

「終りだ！天地乖離す開闢の星！」  
エリツンユ

またアレか！！

「くそ！防御できなっ！？」

って、フェント！？

「約束された…勝利の剣！！」  
カリパー

紫色の閃光と金色の閃光が、ぶつかり合った。  
エマ  
カリパー

しかし、対界宝具と対城宝具の差は歴然だった。

「っち！不味い！コスモス師匠直伝コロナモード！」

忘れていたが、俺がモードチェンジすると髪の毛の色が変わる。コ

ロナだと髪の毛の80%が赤になる。

そして、思いっきり力をこめた。

そして、鎖が切れた！

「よし！喰らえ！ネイバスター光線！」

ネイバスター光線がエクスカリバーと重なり、エヌマを押し返す。

「悪いが今回ばかりは非殺傷じゃないからな！」

「くそ！2人がかりは卑怯だぞ！！！」

「お前、先、攻撃した。」

「まあ、自業自得だ！」

「ちくしょー！！！」

そのまま、エヌマを完全に押し返し、相手を吹き飛ばした。

結界も解けた。

「さてと、邪魔が入ったけどほら、ジュエルシールド3つだ。」

「ありがとう。」

「じゃあ、まあ、お互いがんばろうな。」

「うん。」

フェントはフェイトの方へと、向って行った。

「はあ、これからどうすっかな？」

### 称SIDE

フェイト対なのは…やはり、なのはの隣に座っている奴がなのはと一緒に居やがったか…

《で、今回はどうすんの？》

《やっぱり、無理か。最低アイツが襲ってくるだろうしな。》

《てか、原作介入だったら、Asで良いじゃんか。》

《しょうがない。暫くは、最低アイツの監視だけにしておこう。》

《そつだな。》

詰んないな……そつだ！

《そつだ！別世界に行って最低系を狩ろうぜ！？》

《《え！？》》

俺の出番までに、修行にもなるからな！





## シードと兄弟2 出会う兄、閃く弟（後書き）

弟は、別世界で修行開始しました。

兄は、フェイト側の転生者にエンカウントしました。

ギルガメッシュもどきはしぶといです。

### シードと兄弟3 再戦の兄、旅立つ弟

称SIDE

「さてと、別世界に行きますか!」

「破壊神様、どうやって行く気ですか?」

「あ……」

「たくもつ、しっかりして下さいよ!魔方阵の中に入れば轉移できますよ!」

「すまん、すまん。ポルタ・ド・デモニーオ!」

『Porta do dem?nio!』

デーモンの魔方阵が出現しそこに入る。

「でも、下手に開けないでくださいよ。ちゃんとノックしないと不法侵入になりますぞ。」

「へえ、魔界にも法律とかあるの?」

「まあ、私の気まぐれで作ったんですけどね。」

「気まぐれかい……」

そんなこんなで、別世界に行った。

学校？ローレイラの怪しい影に行せたから問題ない。

〜とある管理外世界〜

「で、ここに転生者が居るのか？」

「はい！でも、このドコにいますかまでは分かりませんよ？」

「まあ、何とかなるだろ。」

こんな感じで、転生者殺しを始めた。

## 紡SIDE

あの転生者2人との戦闘の後、俺は町を歩いている。

しかし…

「何で俺に付いて来る？フェント？」

なぜか付いて来る奴がいた。

「貴方、ジュエルシード、2個。」

「3個渡しただろうが。」

「なら、隙、奪う。」

「それを本人の前で言うか？」

「あ……」

「……（真面目なのか？馬鹿なのか？天然なのか？）」

そんなことを考えている間に、神社に着いた。

「そろそろ、散歩も終了だ。俺は帰るからな。」

「じゃあ、倒す。」

とか言っつて、いきなり結界張りながら不可視の剣出すの止めて下さいよ！

「なら、コネクトブレード！」

ブレスレットから剣出して受け止める。

「今回、本気！風王鉄槌！」  
ストライク・エア

「んな！？」

いきなり、とんでもない威力の風の塊が飛んで来た！

「危ねえ！ウルトラバリア！」

急いで、バリアを張った。

「危ねえだろうがっ！？」

今度は約束エクスされた勝利の剣カリバーの閃光が飛んでできやがった!!

「避けない、一撃、決める!」

「コネクションショット!」

十字に組んだ腕から光線を出して、エクスカリバーの閃光を上をそらす。

「!?!」

「コネクションショットは攻撃用の技じゃない。光線系の技を反射するための技だ。(エヌマ・エリシュは跳ね返せなかったけどな。)

「なるほど、上、そらした。」

「喰らえ! ネットトラックボックス!」

コスモス師匠直伝の捕縛光線だ。

「はああ!」

つて、斬りやがった! ベーシカルバルタンのドライクロー光線と相殺した位なの!?

「約束エクスされた勝利の剣カリバー、最高の、剣。」

そうでしたねー

「なら、プラスブレスレット！」

コネクトブレスにプラスブレスがくっつく。

というか、メビウスのブレイブモードの時と変わらない。

「<sup>エクス</sup>約束された…勝利の剣<sup>カリバー</sup>……！！」

「コネクションプラスブレード……！！」

閃光と輝く剣がぶつかった。

「今だ！リジエクシオン！」

俺は、剣をブレスから切り離れた。

そのまま煙が巻き起こり、俺はその隙に離脱した。

## フエントSIDE

「逃げた……」

ジュエルシード、欲しかった。

彼、できる、ならば、フエイト、手助け、欲しかった。

彼、恐らく、転生者、上位。

敵、強敵。

味方、心、強い。

「また、会って、みる。」

私、帰る。

## 進SIDE

はっはっは！読者の諸君！俺の名は欲道進、この小説のオリ主だ！  
！（メタ発言はよせ変態！by作者）

はっはっは！作者も俺の美貌と能力に嫉妬しちまったか？そりゃそ  
うだ！

俺は顔はFATEのランサー、能力は仮面ライダーオーズだぜ！こ  
れは転生者の中でも最高クラスの待遇だぜ！

しかし、原作主人公なのは達は俺を避けている様だ。否、惚れて  
いるのは間違いない！多分！

なのになぜ避けるのか！？それは、俺の中では幾つかの答えが出て  
いる。

1・小学生には恋というものがよく分からないので自分の胸の高鳴  
りに不安を感じている！

2・俺のイケメン過ぎのせいで周りの嫉妬を買うのを怖がっている！

3 ・いちばーん、有り得ないが俺以外に好きな人が居る。

4 ・最後に、転生者に魅了系の呪いを掛けられている！

さあ、どれだと思う？読者の諸君！？

ん、これが7割の答えか…どれどれ……

・お前の変態精神が駄々漏れなんだよ！変態野郎！！

………ビリビリビリッ！！（無言で紙を破く音）

はっはっは！そんな訳ないじゃないか！

皆して、イケメンの俺に嫉妬して、苛めないでくれよ！なんて根暗な苛めなんだ！

あ、なのは、こんな僕を慰めてくれよ……！

「え？あ、え、うん…泣かないでね………」

うひよおおおお！！なんて良い子なんだ！！（泣）

皆も、彼女の様な優しい心で居てくれよ！

さて、今回は僕の初戦闘時の回想らしいし、さっさと話そうか！

~~~~回想~~~~

俺が始めて戦闘したのは……あの運命の日、この世界で泣いている

なのは始めてあった時だ。

俺がなのは会おうとした時に、転生者が一人ストーカーしているのに気づいた。

どうやら、そいつは転生者を待ち伏せしていたらしく、なのは近づいた俺を襲ってきやがった。

そいつは相当の手だれらしく、あっという間に結界に俺を引きずり込んだ。

だが、俺はそいつにかっこよくパンチでカウンターして、そいつが怯んでいる間に変身した。

だが、タトバソングはかっこ悪いので俺は、タジャドルに変身した。

『タ〜ジャ〜ドル〜』

そして、そいつの能力はどうやら、ISの白式らしく、雪片二型で俺を狙ってきた。

しかし、こっから俺の出番よ。

どうやら、アイツは結界を張った事によって、町に被害が出ないようした上に、結界を思いつきり踏んで、俺に向って飛んで来た。

なるほど、ISの足で思いつきり踏む事で、一時的に瞬間加速イグニッション・ドライブより少し劣るくらいのスピードを出したか。

しかし、タカヘッドの視力でそれを逃さず捉え、セルメダル7枚の

ギガスキャンを当てた。流石、俺！！

『ギン、ギン、ギン、ギン、ギン、ギン、ギン！ギガスキャン！！』
しかし、それでもなお動き続けるIS。

なるほど、どっかの小説で呼んだISのデバイス版か。

魔力が多ければ、稼働時間も多いと言う事か！

だが、俺も油断せず、そいつの機体を見続けた。

しかし、タカヘッドは使い続けると疲労が増す上に、コンボも負担が凄い。

一撃で決めなくては不味い！そう思って、タカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バツタ、セルのギガスキャンを発動した。

『タカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バツタ、ギン！ギガスキャン！！』

「喰らいな！雑魚！イリユージョンギガフレイム！」

俺のネーミングセンス最高だぜ！1個の火の塊は8つに別れ、そのままの野郎に直撃した。

それでもしぶとく、奴は生き残っていた。

どうやら、完全防御まで再現していたか。

そいつは更に、零落^{れいらく}白夜^{びやく}を使用して俺をかく乱し始めた。

しかし、オーズの力はそれを上回った。

『クワガタ・カマキリ・バッタ！ガクタ、ガタガタキリッバ！ガタキリバ！』

切り裂かれる瞬間に8体に別れて、奴の剣は俺に届かなかった。

「残念でした〜」

『スキヤニングチャージ！』

そのまま、囲むように並んでいた分身達と共にガタキリバキックを奴に浴びせた。

「グアアアア！！」

「ま、恨むなら襲い掛かってきた自分を恨みな！」

そして、俺は気を取り直して公園に居たなのはに挨拶した。

「ねえ君、何で泣いてるの？」

〜〜回想終了〜〜

あの頃から数年が過ぎ、俺はなのはと友達以上恋人未満な関係になりました。

「な？なのは。」

「え？な、何？」

「あ、なんでもない。こつちの話。」

「（なんか、進くん不気味なの……）」

シードと兄弟3 再戦の兄、旅立つ弟（後書き）

【華麗なオリ主のテンプレあとがきOR反省コーナー】

作者「おいおいおいおい！！引つ張るな変態！」

進「変態じゃねえよ。進だ、進！この小説のオリ主だぞ！」

作「だー！分かったよ、進！何でこんな所に連れて来た？っ！まさか、お前、ホモだったのか・・・「違うわ！」」

進「今日此処に集まって貰ったのは他でもない！こう言う転生物に付き物なあとがきコーナーだよ！」

作「ああ、作者とキャラが喋り合うアレね。」

進「そうだ！そういう事で、モブキャラをつれてきたぜ！喜びな！」

紡、称、虚夜「くくく（うぜえ〜）」「」「」

作「あれ？翔一とフェントは？」

虚夜「翔一はスーパーまで買い物だ。」

紡「フェントは、しつこいから気絶させた。」

進「そんな事より、これまでの事について語り合おうぜ！そういう事で、お題をドン！」

【最初の戦闘について】

作「一番最初は…紡VS5大EX怪獣&ギルガメッシュもどきだったな。」

進「はいはい、作者さん！質問です！何でオリ主の戦闘じゃなく、モブの戦闘を先に書いたんですか！？」

作「それは、君がモブだからで、紡が主人公だからです。」

進「な…ん…だと…？」

紡「今更気づいたか。」

称「細かく言うなら、俺は副主人公だ。」

虚夜「俺はレギュラーって所か。」

進「なら俺は！？」

作、紡、称、虚夜「」「」「変態、もしくはかませ犬。」「」「」

進「うわ~~~~ん！こんなコーナー止めてやる~~~~！！」

作「君が始めたんだから、最後まで責任もって続けましょう。」

紡「てか、いきなりハードな戦闘だったな。」

称「なら、分身 分離 撃破を最初にやればよかったじゃん。」

紡「だって、浄化したら一々、モードチェンジしなくても出来たじやん。」

作「で、ギルガメッシュもどきのせいで、ルナ コロナ ルナってモードチェンジしちゃった訳だ。」

紡「まあ、失態は認めよう。」

進「ははは、主人公のくせにだっせえな、おい！」

作「えっと、今回は称でコイツをボコる話にしよう。」

進「すいませんでした！！（土下座）」

虚夜「次の課題だ。」

【フェントについて】

進「おお！新キャラについて話す！これはテンプレだな！」

作「まあ、顔はフェイトと変わらず、髪形はセイバーで体は「約束された勝利の剣……！」ガードベント！」

もといガードベント
進「グアアアアアア……！」

称「おい、作者！それ俺の技だぞ！」

紡、虚夜「（アレ、技だったんだ……）」

フェント「それ、言ったら、分かる？（殺気EX）」

作「このかませがボドボドになる！」

フエント「その、布、ガード、出来る？」

作「あれ、布切れだけ残ってる……」

紡「あっちゃあ〜」

称「かませにならずに死んだか。」

虚夜「迷わず成仏しろよ……」

進（死に掛け）「か…って…に…ころ…す…な…！」

フエント「あれ、何故、生きてる？」

作「アレの存在理由は、俺の盾とかませだけだ。」

進（もう再生済み）「ひでえ!!」

紡「最後の課題だ。」

【これからについて、恋愛編】

進「そうだよ！これもりりなのテンプレだな！」

作「まあ、読者へのアンケートだけど……」

紡「で、誰のヒロインだ？」

作「お前、称、虚夜のだ。」

紡「翔一は？」

作「八神の養子だ。わかるだろ？」

称「そういう事か。」

虚夜「で、アンケートだけど、どうなる？」

作「じゃあ、お前らの好みを言え！」

紡「静かな女性。ロリコンではない。」

称「特になし。」

虚夜「ん〜と、出来れば年上で。」

進「俺は勿論はー」「お前には聞いてない！」「Orz」

フェント（顔が少し赤い）「紡、私、好き？」

紡「襲い掛かってくる奴は嫌いだ。」

フェント「……（悲しみと怒り）」

作「（てか、3000年間も訓練ばっかだったこいつに、彼女が出来るのか？）」「

称「さて、兄貴が多分、死にそうになるだろうからこれにて終了！
次回もこの【進フルボッココーナー】をお楽しみに！」

進「タイトル変わってるし!?!」

フェント「紡、覚悟ッ！」

紡「どうして、こっぴごた~~~~!!」

作「(やっぱり、予想通りか…)(」

シートと兄弟4 中途半端な兄、壊す弟(前書き)

虚夜の台詞をこの更新の後、全部直します。

シードと兄弟4 中途半端な兄、壊す弟

称SIDE

「やっぱりつまんねえ〜!!」

俺は3人の最低系を倒した。

けど、つまらない…

最初の奴はフェアリーテイルのナツの能力だった。

ドラゴンの炎を食われたけど、ボンダーデ・ド・デウラゴンでまったく効かなかった。

次の奴はブリーチの鏡花水月を持っていた。

完全催眠は厄介だったけど、何も無い所で掛かったからドラゴンの火炎放射を適当に当ててやった。

最後の奴は仮面ライダーカイザだった。

「誰そいつ?」って言ったら、語り始めたのでその間に丸焦げにしてやった。

「やっぱり、原作に介入しよう!」

やっぱり、人生は楽しまなきゃな!

なのはSIDE

皆さん、こんばんわ。高町なのはです。

私は家族や友達と一緒に温泉にやって来たのですが、ジュエルシードの発動を感じて私とユーノ君、後……進君は急いで向ったの。

でも、フェイトちゃんとアルフさん、それとフェイトちゃんのお姉さんが既に封印していました。

ユーノ君とアルフさんは別の場所に転移して、フェイトちゃんのお姉さんと進君が戦いを始めました。

更に、フェイトちゃんがジュエルシード1つを掛けて私に戦いを挑んできました。

そして、フェイトちゃんが襲いかかって来たのですが、そこにいきなり魔法弾が飛んで来ました！

驚いて、その方角を見たら可愛い女の子が…

え、何あの私より小さい女の子？

虚夜SIDE

「ついにやり始めやがったか。」

称の野郎…、ユーノ・アルフにエレメント10体、なのは・フェイ

トにリリース3体、転生者の方にドラゴン2体が……

そう言えば、転生者が拍子抜けだったらしいな。

まあ、最低系は能力任せの過信、傲慢が多いからな。

能力を自分の物だと思ってやがる。

まあ、その能力は俺が生かすとしてだ。

現状は……ユーノ・アルフはエレメントに魔力を吸われて焦ってるな。

なのは・フェイトもリリースの攻撃に焦ってる、てか戸惑ってる。

転生者2人は、あ、もう倒しやがった。

まあ、オーズの方はかなり疲れたらしいが、ってエクスカリバーが直撃しやがった。

まあ、いい気味だろ。

そんな事より原作組はユーノとアルフは倒したな。

なのはとフェイトも唯の魔力体だから普通に倒したな。

その後は、原作通りフェイト達が帰る……な分けないか……

称の野郎、全員集まった所で邪神を召喚しやがった！

ユーノとアルフがバインドで封じて、残りが一斉攻撃して終了。

今度こそフェイト達が消えたか…

さて、俺も帰るか…

進SIDE

何でだ!?

どうしてオリ主の俺があそこまで苦戦した!?

否、そんな事より、何だあの竜は!?

セイバーもどきの方にも居たし、なのはと淫獣は子供や火の玉を見
たって言うし……

つち、イライラして来た…!

久しぶりに転生者狩りをするか!!

フェントSIDE

原作、違う。

謎、竜。

オーズ、弱い。竜、苦戦。

明日、質問、紡。

紡SIDE

「で？俺の所に来たと？」

またコイツか……

「正解。何、知ってる？」

「知らん。」

「本当？」

「ああ、知らん。」

「ジュエルシード。」

「ここで、戦う気か!？」

「嫌、場所、移「ぐ~~~~」う「……………」」

まさか……

「つぶ。」

顔が赤いな、フェントちゃん？

「違う！これ、能力。」

ああ、なるほど…

「セイバー、同じ、望んだ。」

「やっぱり、腹ペコ王まで貰ったのか。」

「ステータス、言う、忘れた。」

「じゃあ、そのバイキングで奢ってやるよ。」

「本当？嬉しい。」

くく30分後くく

「じゃあ、お代はここに置いてくから。」

「食料、ありがと。」

「じゃあな。」

よし！うまく逃げれた！

くく10分後くく

「あ、戦う、忘れた。」

今度から、これで行こうかな？

家に帰ってから気づいたが、俺の今までの介入は中途半端だった。

「こんどから、積極的に行くか？」

管理局に接触したいしな…

あれ、ニュースだ。

何々、脱獄したハッキング犯の内3名が死亡？

服だけ残して、死体が無い状態で発見された？

なんじゃこりゃ？

〳〳次の日〳〳

フェントが着いて来た。

「今度、誤魔化す、無し。」

「ええ〜？」

しかも、先にバイキングで食って来たようだ。

「約束された勝利の剣^{カリバー}!!」

「ぎゃあぁー！！不幸だぁー！！」

「避ける、無し!!」

「殺したいの！？ジュエルシードが発動するかもよ！？」

「貴方、封印、嚴重。」

「そうですねー！！」

俺のジュエルシードの封印はウルトラマンの力も有るからかなり堅い。

魔力ランクS+辺りじゃないと暴走しない。

っーか……

「前から疑問だったけど、どうしてギルガメッシュもどきもお前も、結界張るのが上手いんですかー！！？」

いつも、知らないうちに結界有るし！

叫びながらも、剣を避け続ける。

「練習、あるのみ。」

「結界しか練習してないんじゃないのー！！？」

そんなぐらい上手いし！

「なら俺がすることは逃げる事！喰らえ、光の国、基礎の基礎！光の放射！」

「っく！？前、見えない！？」

「ネクサス師匠直伝！オーバーレイシユートルーム！」

こうして、俺は結界をオーバーレイシユートルームで破ってスペー
スモードで宇宙まで逃げた。

「あれ？俺、介入する為とはいえ休暇中だよな？」

何か納得いかないこの現状。

……そろそろ、マジで最低とフェントをどつかしたくなって来た…

シードと兄弟4 中途半端な兄、壊す弟（後書き）

【進フルボッココーナー】

作「まさかの第2回目です。」

進「って、タイトルがおかしいだろうが!!!」

作「今回、このコーナーに出るのはこの6人です!」

進「人の話を聞け!!!」

作「なのは、フェイト、はやて、紡、フェント、虚夜の6人です!」

なのは「作者さん、私とフェイトちゃんは少ししか喋ってない上に、はやてちゃんはやったく喋ってないですよ?」

フェイト「もっと私達の出演増やさないと、読者さんから文句を言われちゃうよ?」

はやて「でも、うちはAsから沢山出演があるんやろ?それまでちよいと待ってるよ」

虚夜「そういう事だ。さっさと、妹を出せよ!」

進「俺の彼女もだ!」

フェント「私、妹、出して。」

作「まあ、クロノさんが登場する辺りから、出番が増える筈だからちよつと待つてなつて。」

進「何で、俺は呼び捨てなのにKY野郎はさん付けなんだよ!」

作「俺、結構クロノつてキャラ的に好きだし。お前は変態だし。」

進「ちくしょー!ー!ー!ー!」

なのは「作者さん、少し言い過ぎなんじゃないかな?」

作「だって、コイツ書くときは早く終らせたくて無意識にキーボードを叩く位だぜ?」

なのは「そうなんだ…」

紡「で、今回は何するんだ?」

【最低系について】

作「進は…不本意だが最後まで生き残る。」

紡「ギルガメッシュもどき…最川恵留はどうだ?」

作「アイツは消えるぞ。」

虚夜「つーか、今回の最後にフラグが建ったじゃねえか。」

紡「アイツはしつこいな…」

作「とつと消したいが、ウルトラ戦士としてな…」

虚夜「称だって苦戦したし…アレは撤退か。」

進「俺は生き残るの？マジで!？」

作「かませ犬と、このコーナーのタイトルの為にな。」

進「やっぱ、そうだと思ったよ!こんちくしょー!!」

作（まあ、更正させる予定だけどね。）

なのは「それを本人に言えば良いのに…」

フェント「次、これ。」

【主要人物の強さ】

進「俺が最強さ!」

作「能力的にはこうだ。」

虚夜> 紡> 恵留> 称> フェント> 進> 翔一

虚夜「俺は全員の能力が使えるからな。」

紡「まあ、技は多いし、防御に関してなら負けないな。」

作「ギルガメッシュの能力は強力だし。」

紡「称は奥の手を使えば、恵留にも勝てるだろ。」

フェント「対魔力、エクスカリバー、魔力運用。」

進「てか、何でこんなに低いの!?!」

虚夜「まあ、翔一は能力はそこまで強くないわな。」

作「実際に闘つと…!」

虚夜「紡>称>恵留>フェント>翔一>進

進「なんで俺、一番下なの!?!」

虚夜「翔一より修行してないからだろ。」

フェント「貴方、ドラゴン戦、疲労。私、速攻。」

作「使いこなせて無いじゃんか。つーか、かっこつけてコンボばっかだし。」

紡「亜種使え、亜種!」

進「亜種とかかっこ悪いじゃんかよ!?!」

作「(ツブチ!!)」

虚夜「だめだコイツ…!」

はやて「兄ちゃんも、苦勞してはるんやな…!」

虚夜「まあな……」

作「さて、今回はこれ位にしておくか。」

進「……」

なのは「進君が倒れてるけど……」

紡「作者はオーズ好きだからな。」

虚夜「コンボも良いけど、亜種も好きって言う変わり者だからな。」

作「それじゃあ、次回もよろしくお願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7329z/>

魔法少女リリカルなのは 破壊の弟、救いの兄

2012年1月14日00時54分発行